序

近代日本語としての「文化」は明治時代の翻訳語として新しく生まれた言葉である。これと似た言葉に同じく翻訳語として生まれた「文明」という言葉もある。この二語は大正時代までほぼ同じ意味で使用されていた。たとえば読売新聞の大正五年八月十八日の社説中には「自国の文化を擁護して泰西文明を罵倒す」とか、「吾等は自己の文明を自覚する前に先づ吾等の文化を造り出さゞる可からず」（インドの詩人タゴールの来日にあたっての記事「自国文化の自覚とは何事ぞ」）とあるが、そこに使われている「文化」と「文明」とに明確な区別はなされていない。それゆえ日本文化はまた「日本文明」とも言われていた。ただし明治期の前半には「文明開化」の語が流行したように、「文明」あるいは同じ意味で「開化」という言葉がおもに用いられていた。これに対して「文化」の語が一般に広まったのは大正十年代（一九二〇年代）あたりからである。ふたたび新聞記事をとりあげると、東京朝日新聞の大正十一年一月八日付の、内藤湖南が書いた評論「日本文化とは何ぞや」の書き出しは、「文化と云ふ語は、近頃流行し、何ものにでも此の二字が附せられると景気好く見えるかのやうである」云々と始まっている。大正十一年一月に三回に分けて掲載されたこの評論の主趣はほぼ次のようなものである。

「国民」の自覚はまず最初に政治的に行なわれる。文化的思想的な自覚と独立は、その後に生じるものである。ところが、「日本人」には国民的自覚が生じると同時に、我が国には固有の日本文化なるものが歴史の最初からあったと信じるむきが、歴史家をはじめ多くの人々にある。しかし、文化とは文化的自覚のもとに自発的に形成されるものである。そのとき外来文化は、豆腐をつくるときの豆乳を固めるニガリのごときもので、自発的な文化形成のきっか

けを与えてくれるものである。そのような文化形成がなされなければ外来文化に拘束されてそれに従属したままとなる。最近の日本文化は以前の中国文化の拘束からようやく脱しようとしているけれども、依然として西洋文化からの拘束を受けていて民族自発の文化はまだよく形成されていない。

内藤湖南は最後に、今後は日本文化に「順適なる発達を遂げしめ、世界の文化に貢献すべき一大勢力となすのが我々の責任である」と結ぶ。つまり、近代国家に対応した本当の意味での日本文化はまだ形成されていないというのが当時の彼の認識であった。さかのぼって前に引用した読売新聞の大正五年の社説でも、今の日本には他国に誇るべき何の文化も文明もない、我らの文化をこれから創り出すべきだと主張する点は同じである。

以上は新聞記事であるが、刊行された著書においてはどうであろうか。「日本文化」という語句を比較的はやく使った近代の著書に、「創造的文化主義」をとなえた昭和四年（一九二九）刊行の稲毛詛風の『日本文化の創造と教育』がある。著者の稲毛詛風は大正時代に「創造教育論」をとなえた学者で人名辞典に教育哲学者とされる人物であった。『日本文化の創造と教育』は、学校教育における文化創造の観点の大切さを説くのが主旨で、その主張はやはり右に引いた大正期の新聞紙上の意見の延長線上に位置づけることができる。

初期の日本文化論が、過去の文化を否定して、なぜこのように文化は新たに創り出されるべきものだと主張しているのだろうか。それは「文化」の意味のとらえ方にあった。つまり「文化」の語には翻訳語として生み出されて以来、「世の中が開けること」という意味が根強くあったからである。そしてその「世の中が開けること」は明治維新以来の日本の大きな課題だったから日本「文化」は、これからできあがるもので、今は論ずべきものがないと考えるのは当然の帰結であった。

稲毛が右の書を刊行した昭和四年は、彼が言うとおり明治維新からすでに六十年が経過している。明治の時代はひたすら西洋の文化をとりいれた「開化」の時代だった。その後、大正モダニズムの時代を経て、稲毛詛風が右の書を

刊行した昭和初期まで和洋混在したモダニズムの時代が続く。彼の目に「実際今日の日本文化は、真に混沌を極め雑多を尽し」ていると映った時代である。『日本文化の創造と教育』はこのような時代状況の認識のもとに刊行されている。

同書で稲毛はまた言う、「今や我が国は多年に亘る外国文化の輸入乃至模倣に行詰りつゝある」と。その一方には第一次世界大戦（大正三～七）後に、ドイツの哲学者オズワルト・シュペングラーが唱えた「西洋の没落」という観念があった。（シュペングラー著『西洋の没落』は大正十五年（一九二六）に日本語訳で批評社から出版されている。原著は一九一八～二二の出版）稲毛もまた同書に、「思ふに、西洋文化の行詰りは全き意味に於ける行詰りである」という。彼は大正末年から昭和初期の足かけ三年、ドイツに留学してもいた。明治維新後六十年にわたる西洋文化の輸入にそろそろ一段落をつけ、今度はそれを素材として新たな日本文化を創造しなければならない、との著者の主張は、こうした認識のもとになされている。

それまで摂取してきた西洋の文化を素材として新たな日本文化を創造すべきだという主張は、内藤湖南の言うところよりも具体的である。江戸時代までの中国・インド・朝鮮からの文化輸入は、それを素材として長い時間をかけて、さらに新たな日本文化の創造につながっていた。一地域の文化の形成は、それ自体の内部からなされるのではなく、他の文化の影響のもとに形成されるものであることは、実際の日本文化の歴史を見ればよく分かる。

稲毛の日本文化論は著者のドイツ留学経験のあとで書かれたものであった。つまり、いったん自国の文化から離れてみることではじめてそれに対する反省意識が鮮明に生まれるわけで、自己の属する文化を論ずるためには、留学でなくともなんらかの形で他の文化との相対意識が必要であることを示している。稲毛の場合は欧州文化と日本文化との対比であったが、この対比は近代以降の日本文化論が持っていた一般的な構図ともいえる。

稲毛はまた日本文化を「国家文化」と言い換えている。この場合の「国家」とは、法律や軍隊と明確な領土を持っ

た中央集権的な権力機構（政府）および国民意識を持った国内の人民によって構成される近代のいわゆる国民国家である。内藤湖南は、「国民」の自覚はまず最初に政治的に行なわれ、その次に文化的思想的な自覚が起こるといっているが、しかし新しく成立した日本の明治国家にとって国内の人民に「国民」意識を植え付けるためには上からの文化政策が必要だった。その「国民」意識の形成は、最初にまず「国語」という統一言語の制定によって基礎づけられた。「国家文化」とは、この近代の国民国家に対応した言葉である。国家はまた、学校教育の制度によって子どもたちに「国語」を学ばせ、それによって「国民」の再生産を行なった。明治政府は、このような国民をたばねながら富国強兵の道を歩み、軍事的には、日清戦争の勝利（明治二八）、日露戦争の勝利（明治三八）、韓国併合（明治四三）、シベリア出兵（大正七）へと進んで行く。『日本文化の創造と教育』が著わされたのは、政府が労働問題や社会のさまざまな矛盾を権力によって押さえ込みながらますます国家主義化、軍国主義化を強め、中国侵略へと邁進して行った時代においてであった。そのような時代の中で稲毛は、これからの日本は「固陋（ころう）な国家主義と殺伐な軍国主義を一擲（いってき）して」、「創造的文化主義を以て外国に対しなくてはならない」と述べる。政治や軍事に対して文化の力を優先させた稲毛の主張は画期的である。「創造的文化主義」という言葉も、これからの国家の教育は、富国強兵に役立つ「国民」を作るためではなく、「次代の文化の創造者を育成するのが其の究極目的」でなければならないという意味であった。これは、当時の国家主義的な時代状況を差し引いて読めば、「世界文化」に貢献できるような人材の育成を目差せ、という意味になるであろう。

日本文化を「国家文化」と呼ぶその言葉には、文化がまずそれぞれの国の国民のアイデンティティ形成に深く関わっているという意味がある。その点で、文化はきわめて地域的なものであり、「世界文化」という言葉には違和感を覚えるが、稲毛には「文化は個別即普遍である」という文化観があった。個別的でもあり普遍的でもあるという矛盾したこの文化の性格は理屈で考えるよりも実例がよく示しているだろう。文化が異なる地域へ伝播するのは、それが地域的なものであると同時に他へ普遍的に開かれているからにほかならない。

以上、稲毛の日本文化論は、明治維新後西洋文化の輸入が六十年を経て飽和状態を迎えたと認識された時代、また第一次世界大戦という大きな戦乱を経験した西洋の知識人が西洋の理性（それはまた文化でもある）に対する絶対的な自信を失った時代状況に向き合わざるを得なくなった日本の知識人から生まれたものであることが知れる。その論調は西洋文化に代わる日本文化の世界的な普遍性を目差すべきことを主張するが、その実、近代の国民国家における「国民」としてのアイデンティティ形成に寄与するものであった。

その後、昭和の時代は、太平洋戦争の敗戦に至るまで偏狭なナショナリズムが高まってゆく。それによって国民のアイデンティティは、天皇を神聖な存在として崇め、日本はすぐれた神の国だとする偏狭な日本文化論のなかで形成されていった。世界的な普遍性を持つ日本文化をつくるという発想は、「文化」の意味を「世の中が開けること」と取った明治の文明開化の延長線上に出てきたもので、そのような発想はもはや過去のものとなった。今日、和食がユネスコの世界無形文化遺産に登録されたのは、それが伝統的に形成された個別固有の文化だからである。つまりは個別であるものが普遍的な評価を得るところに文化の世界的な普遍性がある。

本書のめざすところも、日本文化の個別性を知ることである。ひとくちに文化といってもその分野はたいへん広い。本書では、おもに日本の伝統文化、精神文化をとりあげて、先人の諸説を借りながら概説し、さらにささやかな私見を加えることにしたい。本書を執筆した動機は、日本の大学生に日本文化を講じるためであった。著者の念頭にある読者はおもに若い世代の人々である。戦後七十年、日本の社会は大きく変化した。とりわけ情報化時代の到来、農業などの一次産業の衰退、村落の消滅、単独世帯数の増大、さらに子どもの減少など、伝統的な文化が生きていた地域社会が急激に失われつつある。それゆえ、現代の若者にとって長く継承されてきた伝統文化は日常からますます疎遠なものとなった。そのうえ現代の若者は異文化との接触が日常的に起こる時代に住んでいる。このような現代におい

て伝統的な日本文化を知ることは、各自のアイデンティティ形成に役立つところがあるかも知れない。ただし伝統的な日本文化であっても千古の昔から続いてきたものではない。それはある時代のなかで形成され、いずれは変化・消滅するものである。よって現代の社会変化のなかで伝統的な文化が消滅してゆくことはやむを得ないことでもある。また文化は一朝一夕にして生み出されるものではなく、それゆえ貴重なものではあるが、伝統的な文化だからといってすべてを肯定する必要もない。そのなかには、本人が気付かずに自己の内なる文化として形を変えて生き残り、われわれの意識をいたずらに規制しているものもあるだろう。また失っては実にもったいない将来に残して行きたい独自のものもある。本書の読者にそんな日本文化の一端に気付いてもらえばさいわいである。

（以下、引用文には読者の読みやすさを考え筆者の私意によってルビを追加した部分がある。）

—◇ **第十章　美意識**

北村援琴著『築山庭造伝』（享保二十年〈一七三五〉序）
岡倉天心著、村岡博訳『茶の本』（岩波文庫、一九九二）　再掲
清岡卓行著『手の変幻』（美術出版社刊、一九六六）
西行著『山家集』（日本古典文学大系29、岩波書店、一九六一）
卜部兼好『徒然草』（新潮日本古典集成、新潮社、一九七七）　再掲
藤原俊成著「慈鎮和尚自歌合（十禅師跋）」（『日本歌學大系』第二巻、風間書房、一九八三）
若山滋著『建築へ向かう旅 —積み上げる文化と組み立てる文化』（冬樹社、一九八一）
鴨長明著『無名抄』（日本古典文学大系65、岩波書店、一九六一）
武田元治著『「幽玄」—用例の注釈と考察』（風間書房、一九九四）
正徹著『正徹物語』（日本古典文学大系65、岩波書店、一九六一）
世阿弥著『花鏡』（日本古典文学大系65、岩波書店、一九六一）

あとがき

本書は日本の基層文化から美意識まで全十章を著者が一人で執筆したものである。本来ならば各章のテーマはそれぞれの専門家が独立した一冊ずつの図書として著わすべき内容である。しかし日本文化の多岐にわたる内容を浅学非才ながら一人の著者がまとめたことで首尾一貫した読みやすい叙述にはなったと思う。各章のそれぞれの問題をより深く考えてみたいと思う読者はその方面の専門書をひもといてもらいたい。

本書執筆のきっかけは、地方の大学で二十年以上にわたり「日本文化概論」という講義科目を担当させてもらった経験から、現代の若い読者を対象にした日本文化の入門書の必要性を感じたことである。本書は、人生の大半を二十世紀に生きた著者の立場から、次の時代に生きる若い人々へのささやかな贈り物のつもりでもある。あるいは余計な贈り物かも知れない。伝統文化が生きていた日本の社会は少子化と人口減少によって今日これまで以上に激変したという印象が強い。古いしきたりのなかで民俗文化をになってきた地域社会はその多くが二十一世紀に入って崩壊しつつあるといってもいいだろう。本書で扱った伝統文化は現代人にとって疎遠になったものが多いと思う。とくに若者にとってはこのような伝統文化がもはや異文化に感じられるかも知れない。しかしながら、序文でも述べたとおり、本人も気付かずに自己の内なる文化として形を変えて生き残り、われわれの意識をいたずらに規制しているものもあるように思う。本書はただ伝統的な文化の価値を説くことだけを目的にしたものではない。過去の伝統的な文化であっても、それらはすべて歴史上のある時期に生み出されたものであり常に変化しながら現代に受け継がれてきたものであることを、それが創り出された初めに立ち返って知ることが大切だと思う。そして本書がその理解に少しでも

役立つならばさいわいである。

本書にはできるだけ写真や図を入れて内容の分かりやすさを心がけた。

写真や図の掲載を許可してくださったそれぞれの機関や個人の皆様に感謝申し上げます。また、著者が持ち込んだ本書の出版企画をお引き受けいただいた武蔵野書院院主の前田智彦さんにも感謝申し上げます。

二〇一六年七月

板垣俊一

◆著者紹介

板垣俊一（いたがき・しゅんいち）

略歴

1982年3月東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学（国文学専攻）
1982年4月県立新潟女子短期大学専任講師
1997年4月県立新潟女子短期大学教授
2009年4月新潟県立大学教授
2014年3月新潟県立大学教授を定年退職
2014年5月新潟県立大学名誉教授

著書

1．『前太平記』上・下校訂と解題（国書刊行会・1989年）
2．『新潟県の地域と文化―地域を学ぶために―』（編著　雑草出版・2006年）
3．『越後瞽女唄集―研究と資料―』（三弥井書店・2009年）
4．『江戸視覚文化の創造と展開―覗き眼鏡とのぞきからくり―』（三弥井書店・2012年）など

所属学会

日本文学協会、古代文学会、アジア民族文化学会等

日本文化入門 その基層から美意識まで

2016年7月30日 初版第1刷発行

著　　者：板垣俊一
発 行 者：前田智彦
装 幀 者：武蔵野書院装幀室
発 行 所：武蔵野書院
〒101-0054
東京都千代田区神田錦町3-11 電話 03-3291-4859　FAX 03-3291-4839
印刷製本：三美印刷㈱

ⓒ2016　Shunichi Itagaki

定価はカバーに表示してあります。
落丁・乱丁はお取り替えいたしますので発行所までご連絡ください。
本書の一部または全部について、いかなる方法においても無断で複写、複製することを禁じます。

ISBN 978-4-8386-0466-1 Printed in Japan